

「共感的に聴く・話すスキル」を学び合う授業や生活場面に生かす児童の育成  
－「ステーション授業構想」をもとにした一貫継続した取組を通して－

上越教育大学教職大学院 江部 壮彦 (22年度)  
(在籍校：新潟市立金津小学校)

## 主張

これからの時代に生きる子どもたちに必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」の実現に向け、他者とコミュニケーションを図ることが必要である。そのためには、基本的な社会的スキルを身に付け、適切にコミュニケーションを図ることが重要であると考えられる。

本研究は、「ソーシャルスキルトレーニング（以下、SST）」「協同学習」「クラス会議」を「ステーション授業構想」のプログラムとし、児童のスキルの般化（日常的に使える状態）を目指した。また、それぞれの手立ての際には、フィードバックを行い、スキルの般化につなげようとした。手立てを一貫継続して行うことにより、スキルを生かして友達と関わり合う姿や友達とかかわり合うよさを認知している様子が見られた。

## 1 はじめに

上越教育大学教職大学院には、「学校支援プロジェクト（以下、連携）」という特徴的な科目の一つがある。これは、「学校支援フィールドワーク」「学校支援リフレクション」「学校支援プレゼンテーション」で構成されている<sup>1)</sup>。これらの活動は、複数人の大学院生と大学教員1名が1つのチームとなり、支援する学校（以下、連携校）に介入し、連携校側の要望による課題解決を目指していくものである<sup>2)</sup>。

連携校の要望は、『「共感的に聴く・話すスキル」を授業場面や生活場面に生かしていくための全校体制づくり』である。それを踏まえ、連携校の職員と協同し、児童が「共感的に聴く・話すスキル」を身に付け、スキルを発揮させながら、授業場面や生活場面でコミュニケーションをとることを目指していく。また、連携校の要望に基づき、4学級（2年2組、3年1組、6年1組、6年2組）を支援することになったのだが、以下からは、私ともう一人の院生が支援した2年2組の実践を取り上げ、詳細を述べていく。

## 2 研究主題の設定理由

文部科学省（2021）は、「探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実すること」と述べている<sup>3)</sup>。このように、社会に必要な資質・能力を身に付けるためには、他者とコミュニケーションを図ることが必要であると考えられる。

藤枝・相川（1999）は、対人関係において適切にかかわることができない児童の例として、相手の話が聞けない児童、自分の意見をきちんと伝えられない児童を挙げている<sup>4)</sup>。さらに、このような児童は基本的な社会的スキルが獲得されていないと述べている<sup>5)</sup>。基本的な社会的スキルについて、藤原・濱口（2012）は「社会的スキルの中でも「聴く」や「主張する」といったスキルは基本的なスキルである」<sup>6)</sup>とし、石井・新井（2017）は人間関係を成立させるために必要なコミュニケーションの基盤として、聴くスキルと話すスキルを挙げている<sup>7)</sup>。つまり、基本的な社会的スキルである聴く・話すスキルを身に付け、適切にコミュニケーションを図ることが重要であると考えられる。

聴く・話すスキルを身に付けるための方法として、社会的スキルの学習であるSSTがある。藤枝・相川（前掲）<sup>8)</sup>、後藤ら（2000）<sup>9)</sup>によると、その中でも学級単位のSSTによって社会的スキルを高めることにつながる事が明らかにされている。しかし、佐藤ら（1993）はSSTで習得したスキルや行動の般化が起こりにくいということを課題として指摘し<sup>10)</sup>、荒木ら（2007）<sup>11)</sup>、曾山（2012）<sup>12)</sup>は、学校生活の様々な場面で、日常的に繰り返して指導する必要性を示している。このようなことから、スキルの般化を目指すために、SSTによる聴く・話すスキルを生活場面や学習場面の中で日常的に指導するプログラムを進めていくことが必要だと考えられる。

これらのことを踏まえ、連携校職員との協同を通して、SSTの手続きに基づき「共感的に聴く・話すスキル」の般化を目指していくことを目的とした。なお、「共感的に聴く・話すスキル」の定義について、デイヴィス（1999）を参考に、相手の視点に立ち、その相手を理解しようと聴いたり、話したりするスキルとする<sup>13)</sup>。

## 研究仮説

学級づくりにおいて、学級担任の大切にしたい「共感的に聴く・話すスキル」を指導の核にし、生活場面や学習場面を通して一貫継続した取組を協同で行うことで、そのスキルを児童に身に付けることができる。そして、児童は、そのスキルを発揮しながら、他者とコミュニケーションを図ることができる。

## 3 研究の実際

### 3.1 対象・期間

新潟県内の公立小学校2年2組（男子11名、女子10名、計21名）を対象とする。期間は、令和3年9月1日～11月30日の計36日間である。

### 3.2 研究の基本方針

赤坂（2011）<sup>14)</sup>は、スキル般化を目指すためのプログラムとして、「ステーション授業構想」を提案し

ている（資料1参照）。鳥居ら（2022）は、「ステーション授業構想」の取組によって、児童が対人技能のよさや価値に気付き、学習場面や生活場面で対人技能の活用につながることを明らかにしている<sup>15)</sup>。また、川口・赤坂（2021）は、協同学習とクラス会議において一貫して対人技能を指導する中で、教師の価値付けの重要性を示唆している<sup>16)</sup>。教師の価値付けについて、Hattie（2007）は、感情的、認知的プロセスに価値づけるフィードバックが効果的であると述べている<sup>17)</sup>（資料2参照）。

以上のことから、SSTで学習した「共感的に聴く・話すスキル」を基に、フィードバックを含めた一貫したスキル指導を行うためのプログラムとして、協同学習とクラス会議でのスキル指導を実施する「ステーション授業構想」を行う（資料3参照）。また、各手立ての内容の詳細を決めたり、院生と担任で効果の実感や課題を共有したりする時間として、週に1回打ち合わせを行う。

### 3.2.1 SST

藤枝・相川（前掲）は、学級単位のSSTは基本的に「インストラクション」「モデリング」「リハーサル」「フィードバック」で構成されると示している<sup>18)</sup>。なお、連携校では、週1回、朝学活の時間に全校一斉で学級単位のSSTを実施している。連携期間中のSSTについて、藤枝・相川（前掲）<sup>19)</sup>をもとに、「共感的に聴く・話すスキル」をターゲットスキルとしたトレーニングを全職員に提案する（資料4参照）。トレーニングの内容について、全職員と共通理解をし、それぞれの学級でSSTを行う。

### 3.2.2 協同学習

学習場面におけるスキル指導のプログラムとして、協同学習が考えられる。杉江（2004）は、協同学習では、仲間との相互作用を通して、対人技能の側面、学習技能の側面においても、同時学習が期待できることを主張している<sup>20)</sup>。梅山・撫尾（2012）は、Johnsonらが提唱した協同学習の原理を応用したペア学習を行わせることによって、社会的スキルを高める効果があると述べている<sup>21)</sup>。岡田・赤坂（2018）は、協同学習の交流場面において、担任によるフィードバックが対人技能の定着につながることを示唆している<sup>22)</sup>。また、対人技能を指導したうえで、協同学習を行うことによって、友達との適切なかわりが増えることを示唆している<sup>23)</sup>。そこで、今回の協同学習は、ジョンソン（2010）の5つの基本的構成要素を踏まえたものを行うこととする<sup>24)</sup>（資料5参照）。

### 3.2.3 クラス会議

生活場面におけるスキル獲得の取組として「クラス会議」が挙げられる。ネルセン（2000）は、クラス会議について、人生のあらゆる領域で成功を収めるために必要なスキルと態度を教えるものであると述べている<sup>25)</sup>。赤坂（2014）の「赤坂版「クラス会議」完全マニュアル」を参考にし、学級の実態に合わせたプログラムを提案し、クラス会議を実施する<sup>26)</sup>（資料6参照）。

### 3.2.4 打ち合わせ

本連携で、担任と協同して目的達成を目指すため、週に1回の情報共有の場を設定する。そこでは、スキル般化のための実践についての意見交換をし、その後の取組についての目標設定をする。

## 3.3 効果の測定材料・方法

### 3.3.1 SSTの振り返り用紙

SSTの振り返りを行う（資料7参照）。各SSTの目指す姿について「SSTで学んだめあてを続けてほかの学習や生活の中で意識できていますか」という教示文を示し、児童に「◎よくできている」「○できている」「△あまりできていない」の3件法で回答を求める。「共感的に聴く・話すスキル」を児童がどのくらい意識できているかを、人数ごとの表として分析する。

### 3.2.2 3か月間のアンケート

本連携の振り返りとして、「スキルの般化」「SST」「クラス会議」「フィードバック」「授業」の項目について43問のアンケートを「5：あてはまる」「4：ややあてはまる」「3：どちらともいえない」「2：ややあてはまらない」「1：あてはまらない」の5件法で実施する（資料8参照）。「スキルの般化」の項目とそれ以外の項目の連関の有無を分析するために、中野・田中（2012）が開発した「js-STAR」の度数の分析（自動集計検定 $2 \times 2$ ）を用いる<sup>27)</sup>。偶然確率が10%水準で有意（ $p < 0.1$ ）なものの中で、本連携の目的につながる「相手の気持ちを考えながら話を聴いたり話したりできるようになってきている」という項目とその他の項目のどちらも肯定的に回答し、連関係数が中程度の強さ（ $0.4 \leq \phi$ ）以上の項目について取り上げる。協同学習、クラス会議における児童や教師の様子、教師のフィードバックについての観察記録である「フィールドノーツ」からその要因をエピソード等で考察する。

## 3.4 支援の方針

担任は「かかわり合う良さを味わわせたい」という願いを持っていた。それを踏まえ、本連携前の学活の時間で取り組んでいた、困ったことを話し合う「相談会」からクラス会議にシフトチェンジするという要望をもらった。また、授業改善を目的とし、協同学習にチャレンジしたいという要望をもらった。

院生チームの見とりとして、「一部の児童が、友達の発言などお構いなしに、思いのままにつぶやき続けている」「先生の指示を出している時に、別の人を見たり、手いたずらをしたりしているなど、聞き方（聞く姿勢）が気になる」という児童の姿があった。

そこで、担任の要望を受け止めつつ、児童の実態を踏まえながら、以下の通り、支援の方針を決めた。

- ・SSTは、最初は院生がメインとなって行い、途中から担任がメインとなって進める。
- ・クラス会議は、2年2組の児童が司会等を行い、児童中心で進められるようになるまでは院生がメインで行う。
- ・協同学習は、担任と院生が協同しながら授業の構成を考えることに重点を置きつつ、院生で、国語の一単元を行う。
- ・打ち合わせは、担任からの要望がある日に行う。

### 3.5 支援の実際

#### 3.5.1 SST

9～10月は、発表者がメインとなり、「①インストラクション②モデリング③リハーサル④フィードバック」の流れで行った。11月からは、連携後のことを考え、担任がメインとなって行ってもらい、発表者は「④フィードバック」のみを行うようにした。なお、担任と協同してSSTを行うために、フィードバックは担任と発表者の2人で行うことにした。

フィードバックは、ターゲットスキルの定着に向け、肯定的な評価や行動を修正するような声かけを、活動中の児童に対して個別に行ったり、活動後の全体に向けて行ったりした。毎週、ターゲットスキルは変わるのだが、児童はその日のターゲットスキルだけでなく、以前に学んだターゲットスキルを活かしてSSTに臨むようになった。

#### 3.5.2 協同学習

担任の要望は、「どのような学習内容の時に、どのように協同場面を取り入れるとよいのか」というものだった。打ち合わせでは、栗原ら(2011)<sup>28)</sup>、赤坂(2016)<sup>29)</sup>、杉江(2011)<sup>30)</sup>、岡田・赤坂(前掲)<sup>31)</sup>をもとにし、「①1時間の流れを提示する(見通し)」「②学習課題を行動表記型にする」「③児童が交流する場面を設ける」「④交流する場面の直前に「かかわり方課題<sup>\*</sup>」を提示する」「⑤フィードバックをする」という流れの協同学習を提案し、授業の内容を検討した。

※かかわり方課題…連携校独自の「聴く・話す」に関する5つのスキル

「①人の話を最後まで聞く」「②相づちをうちながら聞く」「③友達の話を分かろうとする」  
「④クラスや班の全員が同じくらい話す」「⑤時間いっぱい話す」

提案した流れをもとに、担任の先生と協同して学習内容・児童の実態を踏まえた授業を考え、実践してもらった。授業で「インプット型の学習」と「アウトプット型の学習」のどちらを重視するかによって、児童の協同場面が変わることが分かった。

授業を行う際には、児童が「共感的に聴く・話すスキル」を活用しながら交流する協同場面を設定し、授業で身に付けさせたい「かかわり方課題」を提示して交流させた。それを意識して交流する様子が見られたら、発表者は見逃さずに声をかけて価値づけるようにした。授業の最後には、担任に、授業のまとめとスキル活用についてのフィードバックを行ってもらった。

学習内容によって協同場面は変わるのだが、③～⑤の流れの学習を繰り返し行うことで、授業で身に付けさせたい聴く・話すスキル以外のスキルも意識しながら、授業中にかかわり合う児童が見られるようになった。

#### 3.5.3 クラス会議

赤坂(2014)では、クラス会議前に「児童が効果的に話し合うための価値やスキルを学ぶためのアクティビティ」を行う<sup>32)</sup>。そのため、打ち合わせや児童の観察を通して、学級の実態を把握し、それに合うように9～11月の計画を考えた(資料9参照)。

まず、マニュアルに載っているアクティビティ4回分を5回分の計画に組み直したものを9～10月上旬に行った。その際には、担任の先生と役割分担をし、協同して実践を行った。それぞれの授業後には、効果的に話し合うための価値やスキルを教室に掲示した。アクティビティを終え、10月中旬からはクラス会議を行った。担任の先生の要望を踏まえ、院生の役割を少しずつ減らすような計画を立てた。○回のクラス会議では、担任と院生が違う視点(「共感的に聴く・話すスキル」を發揮しているか、クラス会議での話し合いの様子等)でフィードバックができるように、指導案の略案を作成し、クラス会議のねらいを共有しながら進めた。クラス会議は児童が交流する場面が非常に多く、「共感的に聴く・話すスキル」を發揮しやすいので、スキルを發揮している児童がいたら、その姿を価値づける声かけを行った。

それぞれのクラス会議において、「共感的に聴く・話すスキル」についてのフィードバックを必ず行うことにより、児童がそのスキルを發揮しながら話し合っている様子が見られるようになった。

#### 3.5.4 打ち合わせ

毎週火曜日の放課後の打ち合わせの時間を設定した。本連携が始まったばかりの頃は、担任の先生の要望により、週2回の打ち合わせを行った。

最初の頃は、担任との信頼関係が築けていないからか、要望や悩みをなかなか聞き出せずいた。そこで、打ち合わせで手立てについての話し合いを行う前に、担任の先生の実践について肯定的なフィードバックをするようにした。それを繰り返し行っていくと、少しずつ信頼関係を築いていくことができた。信頼関係が築けてからは、担任の先生から要望や思いが出るようになり、打ち合わせを通して、要望を受け入れた手立ての提案をしたり、悩みを解決するためのアドバイスをしたりできるようになった。

### 3.6 考察

#### 3.6.1 SSTで学んだスキルについて

表1は「◎よくできている」「○できている」「△あまりできていない」の人数である。項目1～8は、共感的に聴くスキルに関する姿、項目9～17は、共感的に話すスキルに関する姿である。また、18・19の項目は、「共感的に聴く・話すスキル」を踏まえた上で「他者との協同」に関する姿である。児童は、すべての項目で「◎よくできている」「○できている」を選択しており、SSTで学んだスキルを学習場面や生活場面の中で意識できていることが分かる。荒木ら(前掲)<sup>33)</sup>、曾山(前掲)<sup>34)</sup>が示していたように、スキルの般化には、学校生活の様々な場面でスキルの指導をすることが必要である。SSTに継続して取り組み、スキル般化のための一貫継続した指導によって、児童が学習場面や生活場面の中で「共感的に聴く・話すスキル」を意識することにつながったことが示唆される。

項目	◎	○	△	欠席者
1	17	4	0	0
2	18	3	0	0
3	18	3	0	0
4	20	1	0	0
5	18	1	0	2
6	13	2	0	6
7	18	1	0	2
8	16	3	0	2
9	18	3	0	0
10	14	7	0	0

項目	◎	○	△	欠席者
11	17	4	0	0
12	17	4	0	0
13	18	3	0	0
14	17	2	0	2
15	15	0	0	6
16	16	3	0	2
17	17	2	0	2
18	17	2	0	2
19	16	3	0	2

(人)

表1：SSTの振り返りアンケートの結果

### 3.6.2 「共感的に聴く・話す」スキルの般化について

アンケートの結果、本連携の目的につながる「相手の気持ちを考えながら話を聴いたり話したりできるようになってきている」とスキルの般化の項目「困っている友達がいたら助けたいと思う」「相手の様子を見ながら話している」で連関が見られた。

#### ① 担任の願いによる継続した手立て

表2は、1～3回目のクラス会議の議題と解決策である。会議では、表にある解決策の他に「みんなでがんばれと言う」や「だれかといっしょにする」などという案も出された。担任が1学期から継続して、困っていることを解決する相談会を行い、その活動の価値を伝え続けたり、子どもたちの姿を価値づけたりしてきた。それにより、1回目の会議から、困っている人を助けようという視点での解決策が出されたようである。相談会を通して、困っている友達がいたら助けることの価値の大切さを学び、その大切さがクラス会議の一連のプログラムで強化されたと考えられる。

	議題（提案者）	解決策
1回目	みんなの前で上手に話せるようになるにはどうすればいいか（院生）	友達になる
2回目	上手に片づけができるようになるにはどうしたらいいか（院生）	場所を決めてしまう
3回目	集中しすぎるとちょっと周りが見えなくなってしまうからどうしたらいいか（担任）	首をちょっと斜め後ろに向ける

表2 1～3回目のクラス会議の議題と解決策

#### ② 担任の願いをもとにした手立て

院生の協同学習では、担任の「かわり合う良さを味わわせたい」という願いを踏まえ、ペアで授業の振り返りを共有する時間を設けた。以下は、2回目の授業での振り返り場面である。

A：自分のがんばったことは話すです。前は、どちらでもなかったけど、今は、だいたいできたのでうれしかったです。  
 B：よかったじゃん。（拍手）  
 院生：どうして、よかったじゃんって言ったの。  
 B：前（1回目）の授業の振り返りの時に「すごいじゃん」と言われて嬉しかった。  
 （フィールドノーツより）

Bさんは、1回目の授業で話したことに対して、自分の話を価値づけてもらえるよさを実感したことが分かる。そのことが、BさんがAさんに対して「よかったじゃん」と話している姿につながったと言える。担任の願いをもとに児童のかわり合う場面を増やしたことで、相手の様子を見ながら相手に合わせた会話が学級内で増えていると考えられる。そのため、「相手の様子を見ながら話している」との連関が見られたことにつながっていると推察できる。

## 4 結論

担任の願いや見とりを踏まえた「共感的に聴く・話すスキル」の般化に関する取組やフィードバックにより、スキルの般化や担任の目指す学級像につながっていくことが確認された。また、取組が継続して行われていたり、フィードバックの頻度が高かったりすることで、それらの効果が高まることも確認された。

これらをふまえると、協同で目的を達成するための要素として、以下の2点が結論づけられると考えられる。「①ゴールのビジョンと、目的達成のための手段を共有すること」「②定期的にゴールの再確認や現在の取組等の情報共有の場を設定し、協同性を高めていくこと」である。杉江（2016）は、教師の協同について、一律の手法で同一歩調をとりながら実践をするだけではなく、それぞれ教師の個性に応じながら共有する課題を解決していくことが効果的ではないかと述べている<sup>35)</sup>。このことから、①・②を踏まえ、「共感的に聴く・話すスキル」の般化を目指す中で、情報共有を行いつつ、学級の実態や担任の教育観を最大限生かした取組を一貫継続して行うことが重要であると言える。

しかし、今回の取組は、連携校職員と院生チーム間の協同による成果である。実際の現場は、職員間の協同により、様々な目的を達成していかなければならない。今回の成果を踏まえた上で、教職大学院在学中に職員間の協同についての研究を進めていこうと考えている。

## 5 引用・参考文献（資料10参照）